

82

石川元混撰『灸穴図解』に見る漢蘭折衷

誌上発表

加畑 聡子, 星野 卓之, 小田口 浩, 花輪 壽彦

北里大学東洋医学総合研究所

【はじめに】

石川元混(?-1820, 字は子進)の養父・玄常(1744-1815, 名は世通, 字は子深, 号は愚岡)は, 日本で最初の西洋解剖学訳述書『解体新書』(杉田玄白ら訳, 1774年刊)の参閲者として名高い蘭方医である。本発表では石川元混が著した経穴書『灸穴図解』(1815年成, 写本, 国会図書館所蔵)に焦点を当て, 江戸中後期の蘭方医における経穴学を検証する。

【学問姿勢】

『灸穴図解』「例言」には, 「余亦従事于西洋医学, 素識其真面目。故如隧膻骨度, 不拘漢說者, 職是故也。」とあり, 自身を西洋医学に従事する者として取穴法や骨度のような漢方の説には拘らないことが記されている。さらに「一本邦芸州之医, 星野良悦者, 請於国有司, 得刑死軀殼, 剥肉存骨, 因得人身全骸之詳。遂雇工人, 剝製身幹儀。工妙逼真。比之真骨, 不可復弁焉。遠携来東都, 以示衆人。如其脊骨, 則十六椎与十七椎, 相接処為腰脾骨。一身屈伸之司也。故十七椎以下為一葉骨。是為腰監骨・所謂八髎骨也。其髎目自有十非八也。如此差謬不可勝数焉。故覽者以出旧染之外, 眩惑其懸絶, 殆類燕人忘燕也。嗚呼, 良悦垂恵後世, 開導来学, 誠非浅渺矣。」と記すことから, 元混の解剖知識に対する関心と, 従来への誤りを正した星野良悦(1754-1802)によって制作された身幹儀, いわゆる木骨についての評価を伺うことができる。

【『灸穴図解』の内容】

「例言」冒頭には「一 凡経穴所积之本文拋十四経而訓之。其余別挙篇目也」「一 此書也, 為門人設焉。專學灸穴。或間附鍼穴, 亦為令知其隧膻之通行経穴之位置也。故不厭煩而附之。終作図解, 以便探索也。苟且仮筌以求魚之意也。」とあることから, 当時流布していた『十四経發揮』を基本とし, 門人のために灸穴を中心として著し, 経穴を探索しやすいように図解と経穴歌賦を附すなど, 初学者に配慮した経穴書であったことがわかる。さらに「一 吾門若膻穴, 固不拘寸法。然権不得其法, 不便探索也。故所挙寸尺, 以大概量之。」と記し, 元混の門では本来尺寸に拘らないが, 経穴を簡便に探索するためには必要と考え, 尺寸は大体の長さで測り, 多少の差異は効果に影響がないとしている。また, 「肩背腰脊部」「八髎」の末では, 「香川子曰, 上髎・次髎・中髎・下髎者, 在第十七椎・十八椎・十九椎・二十椎, 是也。探之猶板面, 而堅硬。以指頭摸索有穴, 旋可知。雖然磊々非易知。須沈思探之。一名腰監骨。山崎宗運嘗テ西医ノ骨度ニ抛テ, 別ニ八髎ヲ挨ルノ一法アリ。詳ニ図解ニ見タリ。」と記し, 古方派・香川冬嶺(1732-68)が著した『灸点図解』を引いて, 八髎穴を指頭で摸索する方法を引用するとともに, 幕府医官で考証学派とされる山崎宗運(1761-1834, 名は次善, 字は子政)が西洋医学の骨度に基づいて考案した八髎穴の探索方法を図解して示していたことがわかる。実際に, 本書の下巻「取八髎之穴別法」には, 「山崎宗運伝千金方ノ法ニ抛ルト云。寸法ハ中指同身寸ヲ用フ。」という一文とともに, 八髎穴の取穴法が図示されている。

【結語】

石川元混は西洋医学に基づいた解剖知識を重要視しつつも, 古方派と考証学派の経穴学説を引用し, 『灸穴図解』を著していた。江戸中期の蘭方において, 実際の教育及び臨床にあつては, 門人にとっての実用性を考慮し, 漢方を折衷した好例と言えよう。